

お内仏(仏壇)に座る ⑳ ～ご和讃～

仏教は、言葉を超えた世界から、私一人の身の事実を教えてください。言葉を超えた世界に出遇った感動は、「うた」という形で表現されます。お盆やお彼岸の際、皆さんのお宅で一緒にお勤めする『正信偈』も、親鸞聖人が南無阿弥陀仏の教えに出遇った感動をうたった7言120句の漢文での「偈」です。そして、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と節のついた念仏に続いて「弥陀成仏のこのかたは…」とはじまる「和讃」をお勤めします。この「和讃」もまた、親鸞聖人がつくられた詩です。読誦する(声に出して読む)ことを前提に、当時の「今様」という流行り歌の形式で作られたものです。親鸞さんは、そのような和讃を500首以上遺されました。中でも、後の本願寺8世・蓮如上人が「三帖和讃」(「浄土和讃」・「高僧和讃」・「正像未和讃」)としてまとめられたものは、私たちの日常のお勤めでよまれるもので、親鸞さん以来800年近くの長きに渡って真宗門徒に歌い継がれてきた、現代風にいえばミリオンヒットといってもいいものかもしれません。

皆さんがお持ちの『真宗大谷派勤行集』(表紙が赤いので通称“赤本”)には、お馴染みの「弥陀成仏のこのかたは」(P98)から六首の和讃の他、P102ページからは7パターン42首の和讃が掲載されています。ぜひご覧いただくとともに、日々のお勤めで順番にこの和讃をよみ、深く味わっていただくこともお勧めします。この私のことを教えてくれる親鸞さんの言葉にきっと出遇うことだろうと思います。ちなみに、同朋会などで皆さんと一緒に歌う『恩徳讃』も親鸞さんがつくられた大切な和讃の一つです。

最後に、私が大事にしている和讃を一つ紹介します。「煩惱にまなこさえられて 撰取の光明み

ざれども 大悲ものうきことなくて つねにわが身をてらすなり」。人間の煩惱は死ぬまで決して消えません。しかし、その煩惱を照らされ続けるといことが、どうしようもないこの人間が、人間を超えた世界に支えられてここに在ることの唯一の証拠なのかもしれません。それを人間の側からいえば「浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし 虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし」という厳しさです。しかし、そんな人間を包み込む仏さまの「大悲」という大きな世界が同時にここにあるのです。(浄泉寺若院・釋亜世)

令和4年(2022年)年忌表

ご法事(年忌法要)は、亡き人をご縁に、仏さまの教えを、今生きる私たちが聞かせていただく大切な機会です。浄泉寺本堂でご法事を勤めることもできます。

一周忌	令和3年(2021年)亡
三回忌	令和2年(2020年)亡
七回忌	平成28年(2016年)亡
十三回忌	平成22年(2010年)亡
十七回忌	平成18年(2006年)亡
二十五回忌	平成10年(1998年)亡
三十三回忌	平成2年(1990年)亡
五十回忌	昭和48年(1973年)亡

<発行元・問い合わせ>



真宗大谷派 楠林山 浄泉寺 電話 0799-22-4798
〒656-0026 洲本市栄町4-3-43
ホームページ <http://jyosenji.asei.info>